

青蔵高原における民族と人口

松井秀郎*

I はじめに

青蔵高原には標高6,000mを越える高山が林立しており、平均高度4,500m以上の高原には湖が散在し、太平洋やインド洋に流れ出る大河の源流が水音をたてている。ここでの居住環境は、低い気圧、希薄な空気、氷雪による厳寒、強い日射、乾燥、日格差の大きい気温などによって、非常に厳しいものとなっている。しかし、この苛烈な自然環境のもとでも、蔵(チベット)族などの少数民族は営々として生活を続けてきている¹⁾。

1950年には人民解放軍がチベットへの進軍を開始し、その16年後の1965年9月9日に中華人民共和国チベット自治区が正式に成立した。そして、このチベット自治区成立以後には、都市部を中心として漢民族などの定住者も増加してきている。

本稿は、1994年7月に青蔵高原を研究旅行し、この高原における人々の生活を垣間みることができたことを機会に、青蔵高原の人口の中でもとくにチベット自治区の人口に関して報告するものである。

II 青蔵高原の人口分布

青蔵高原は青海省・チベット自治区・シンチャウウイグル自治区・四川省にまたがる高原である。ここでは今回の踏査ルートに沿う青海省・チベット自治区についてみよう。ランチョウ(蘭州)から青蔵公路(109号線)を通過してラサ(拉薩)に致るルートは、チベット自治区へのメインルートである。このルートに沿う主な都市としては、シーニン(西寧)・ゴルムド(格爾木)が挙げられるのみで、ほかには小規模な路村があるに過ぎない。シーニンは青海省の省都(省級行政中心)として約53万人(1982年)の人口を擁する地方中心都市である²⁾。また、ゴルムドは鉄道の終点のある交通拠点都市として重要な位置を占めている。青蔵公路は標高の高い凍土地帯を通るために、道路の不断の修理が必要であり、一定の距離を隔てて道班と呼ばれる道路補修のための基地がある。また、重要な軍事道路にも当たるために兵站(軍隊駐留地)も置かれている。これらの集落と集落との間の未定住地域には、テント生活をする

[キーワード] | 青蔵高原 2 民族 3 人口 4 チベット自治区

[keywords] | Qinghai Plateau 2 race 3 population 4 Tibet Autonomy Region

* 立正大学

遊牧民が見られる（写真1）。

青海省の人口は約446万人（1990年）であり、1982年以降の人口増加率は14.4%であった。これに対し、チベット自治区における人口は約220万人（1990年）であり、1982年以降の人口増加率は16.0%を示した。これは中国全体の人口増加率の12.5%よりも高い数値である。一方、人口の自然変動においても1982年から1990年までの8年間に、青海省が15.8%の増加、チベット自治区が18.4%の増加を示したのに対し、中国全体ではこれらよりも低い14.7%の増加にとどまっている³⁾。

青海省・チベット自治区の人口密度を見ると、黄河支流の湟水に沿うシーニン周辺の地域と、ヤルツァンポ川（雅魯藏布江）流域のラサ周辺の地域で人口密度が高い（第1図）。しかし、これら以外の地域では極端に人口密度が低くなっている。青海省の人口密度は6人/km²（1990年）で、チベット自治区のそれは1.8人/km²（1990年）となっている。

1990年の中国全体の人口密度は118人/km²であり、省市自治区別の人口密度で最も高い上海市では2,118人/km²であることから、これら青海高原の人口密度の低さが認識できよう。また、人口が1万人以上の鎮（町）と城市（都市）の配置についてみれば、シーニンから西に延びる315号線沿いやヤルツァンポ川流域の地域では鎮が連続的に分布しており、青蔵高原東部ではメコン川・サルウィン川の源流部の支流やラサとチョンツ（成都）とを結ぶ318号線に沿って鎮が散在している。

III チベット自治区の民族と人口

チベット自治区は、さきに述べたように、中国でも人口増加率は高いものの人口密度の極めて小さい省区の一つであると言える。その上ここでの人口分布は、自治区内で極めて偏っている。人口の最も密集している地域は、ヤルツァンポ川の中流域とその支流であるラサ川（拉薩河）の流域である。ここで人口密度は1km²あたり10人以上であるが、中でも、拉薩平原、シガゼ（日喀則）でヤルツァンポ川に合流する年楚河の中下流平野や江孜平原、ヤルツァンポ川の中流の湟当平原では1km²あたり50人前後を示し、さらに拉薩城門付近では1km²あたり100人以上となっている。

チベット自治区内では、南東部と北西部とでは対照的な人口分布を示している。南東部の昌都地区・拉薩市・山南地区・日喀則地区の面積は全省の42%を占めるにすぎないが、ここには全省の人口の85%が居住している。これに対して、北西部の阿里地区・那曲地区はチベット自治区の58%の面積を占める



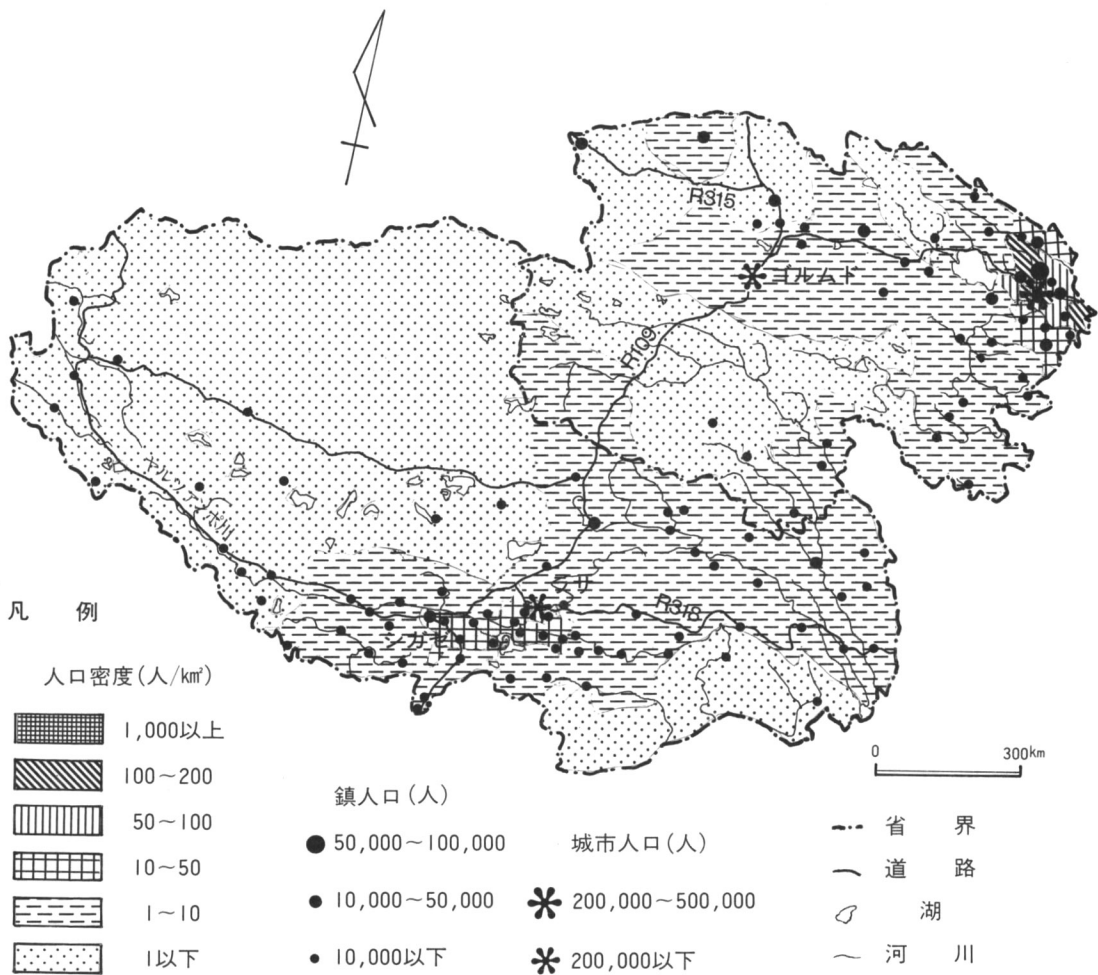
写真1 青蔵高原（青海湖付近）における遊牧民

が、これらの地区の人口は全体の15%を占めるに過ぎない⁴⁾。

チベット自治区成立以降の人口推移を見れば、1951年前には95.7万人であった人口は、1952年には115万人、1964年には125.12万人、1975年には169.11万人、1982年には189.23万人、1990年には219.60万人へと増加している。1951年以降、とくにチベットの民主改革以降には社会的安定によって生産が伸展し、医療衛生は進歩し、農牧民の生活条件と衛生条件は改善された。さらに、婚姻制度の統

一による一夫一婦制の浸透やラマ僧の還俗によりチベットの人口は著しい増加をみた⁵⁾。

チベット自治区に居住する民族のなかで、もっとも多い人種は藏族である。1982年には、中国全土の藏族の人口は約387万人(1990年に約459万人)で、おもにチベット自治区・青海・甘粛・四川・雲南の各省に分散している。1982年のチベット自治区の人口の内、藏族の人口は178.65万人であり、この比率は94.4%である。チベット自治区には藏族の他に漢族9.17万人、門巴族6,100人、珞巴族2,000人、



第1図 青海省・チベット自治区における人口(1982)
中国自然地図集 1989年第1版より作成

回族 1,700 人など 26 民族が居住しており、このほか識別されていない民族も 2,200 人あまりいる⁶⁾。

中国では「一人子政策」が行われていることは周知のことであるが、地域によっては必ずしも完全に履行されてはいない。また、政府としても少数民族に対する政策として弾力的な運用を行っているようである。チベット自治区では「一二三四政策」と呼ばれる人口政策が行われている。これは、漢民族は 1 子、都市に居住する少数民族は 2 子、少数民族の農民は 3 子、少数民族の遊牧民は 4 子という政策である^{7),8)}。このような人口政策のもとで、中国における少数民族の人口増加率は高い値を示している。1982 年から 1990 年の間の中国の人口増加率は 12.5% であり、同期間の漢民族の人口増加率は 10.8% であった。藏族の人口増加率は少数民族の中では必ずしも高くはないが、1982 年から 1990 年の間の人口増加率は 18.6% であり、中国全体や漢民族と比べると高い値を示した。このように少数民族保護策のもとにチベット自治区における人口増加は著しい

が、チベットでの耕地開墾の潜在力は小さく、将来における人口と食料生産との不均衡が予測されている⁹⁾。

IV むすび

中国でも最も人口希薄な地域の一つである青藏高原について見てきた。チベット自治区はその置かれている状況の複雑さから、地域の具体像を知ることはなかなか困難であった。今回の研究旅行によって青藏高原における人間居住の環境を知り得たことは大きな成果であった。広大な無住地域、テントによる移動居住地域、煉瓦製の住居による定住地域、近代的建物による都市地域などを踏査したことは、今後の青藏高原の理解の上でも貴重な示唆になると考える。

(1994 年 12 月 12 日 受付)

(1994 年 12 月 24 日 受理)

注および参考文献

- 1) 西藏人民出版社 (1985): 『藏族簡史』西藏新華書店, 465 p.
- 2) 『世界人口年鑑』1990 年 Vol. 42 による。
- 3) 若林敬子 (1991): 『最新中国人口事情』1990 年人口センサスと少数民族人口, 『人口問題研究』47-2, 29-48.
- 4) 徐華金 (1986): 『西藏自治区地理』西藏人民出版社, 243 p.
- 5) 前掲 4)
- 6) 前掲 4)
- 7) 若林敬子 (1989): 『中国の人口問題』東京大学出版会, 273 p.
- 8) 若林敬子 (1988): 『中国少数民族の人口研究序説』人口問題研究, 第 186 号, 35-57.
- 9) 刘燕華 (1992): 『西藏雅魯藏布江中游地区土地系統』科学出版社, 130 p.